

鼎談「放射線看護学・放射線看護実践の未来」

Tripartite talk “Future of radiation nursing science and radiation nursing practice”

坂口 桃子

Momoko SAKAGUCHI

大阪市立大学大学院看護学研究科

Osaka City University

私はこの度、第3回日本放射線看護学会学術集会企画・実行委員会委員として、学術集会のコンセプトを構築する段階から携わる機会を得ることができました。まずは、会員の皆様をはじめ多くの方々のご協力のおかげさまをもちまして盛況のうちに開催することができましたことを感謝申し上げます。ここでは、私が座長を務めさせていただきました「講演・鼎談」についてご報告させていただきます。

第3回日本放射線看護学会学術集会では、日本看護協会会長 坂本すが先生、日本看護連盟会長 草間朋子先生をお招きし、お二方から基調講演をいただいた後、作田裕美学術集会長を加え「放射線看護学・放射線看護実践の未来」と銘打った鼎談を企画いたしました。これは、本学術集会を貫くメインテーマ「放射線看護実践の知の集積から未来を展望する」に込められた理念や概念を明確に参加者の皆様にお届けできるようにと特別企画したもので、会長講演「放射線看護から放射線看護学へ—今を超える力を—」と一対で完成することを構想した試みでした。

作田裕美学術集会長は、会長講演で看護が実践の科学と言われるゆえんについて、看護の営みは「実践から帰納的に知識を体系化する行為と、体系化された知識を実践に適用する行為が相互に関連し循環しながら、実践の質のたえざる向上を目指している」と、実践と研究の有機的循環の重要性について述べられました。そのうえで、今求められている実践と研究の課題は、サービス財としての放射線看護実践が高い顧客ロイヤリティを得るための方策の追求にあると指摘され、ヒントとして提示されたのは、サービス・デリバリー・システムにおけるイノベーションに関する貴重な言及でした。坂本すが日本看護協会会長は、基調講演「放射線看護の未来—日本看護協会の立場から—」において、日本の人口動態の変化から2025年問題を見据え、必然的に増加する高齢者のがん医療・看護への準備について、日本看護協会の立場から見解を述べられました。非侵襲的ながん治療である放射線治療は高齢がん患者に適応されていくことは想像に難くないとし、放射線看護認定看護師に限らずすべての看護師に放射線の基礎的知識が求められること、また、福島第一原発事故の経験から、看護師には放射線検査・治療の看護のみならず、事故後の心的・外的影響を受けた患者への継続的支援に必要なケア能力の開発も重要であると語られました。草間朋子日本看護連盟会長は、放射線防護学の教育・研究者としてのご自身の長いご経験から、エビデンスに基づく放射線看護教育が不可欠であることを強調されました。そして、看護師の役割は放射線診断・治療を受ける患者・家族への対応とケア、放射線事業所の従業員の健康管理、原子力・放射線事故時の被害者等への対応、看護職自身の被ばく防護の徹底等であると説明されました。

基調講演後の鼎談では、わが国の看護基礎教育における高等教育化の陰で、放射線看護に関する科目、教授

内容、教授時間の低減が続き、結果として広範な層の看護師に放射線看護の知識不足を招いていること、それに付随して放射線看護技術の未開発が議論されました。また放射線被ばくの中でもわが国では、国民全体の被ばく線量の大部分が医療被ばくであること、にもかかわらず医師・看護師等の医療スタッフの放射線被ばくや放射線影響・リスクの知識や技術が不十分である現況が語られました。さらに、医療従事者の被ばく線量の継続管理が法的に定められていない問題が論議されました。こうした、わが国に特有な看護師の放射線被ばく・防護事情の解決には、研究機関・実践現場のみならず、日本放射線看護学会、関連学会、看護職能団体と連携して戦略的に解決することの重要性を確認して締めくくられました。

「鼎談」は参加者のアンケートでも非常に好評でした。